

続ボラッチョ・ボニートのメキシコ便り(No.12)

「時は物事を明らかにし、時は物事をぼかす」

・・・病を治すは、時にして薬にあらず・・・

連日テレビニュースなどで洪水のごとく流されていた、新型インフルエンザ報道が、感染者数の伸びの鈍化とともにやっと少なくなって、安堵の胸をなでおろしている。前回の「続ボラッチョ・ボニートのメキシコ便り」(No.11)のなかで、「一時帰国」という処置を与えていただいたことに対して、感謝しつつも、「一時帰国できて良かった」という、高揚した気分は全然湧き上がってこないと書いた。

メキシコへの再渡航間近になった現時点でもこの考えは変わっていない。最初の発生国と言われた国から帰国したと言う負い目？から、風評被害を恐れて連日何処にも外出せず、家の中でじっと外をうかがい、犯罪者になったことは無いので分からないが(当たり前だが)、どこかに身を潜めてそっと世間の動きを見ている、犯罪者もこんな気分ではなからうかと思ったほどである。

その間は、所在無さにネットサーフィンならぬ、テレビサーチャー、テレビウォッチャーと化してチャンネルを切り替えていた。多分生涯の中で時間的には、この間は一番テレビを見ただろう。

おびただしく流された報道は、どのテレビを見ても似たりよったりで、まだ患者が出ていない時期から、物々しい防護姿の機内検疫官や帰国者の映像、一旦患者が出たら、感染者の上司や関係者に対する容赦しない質問や悲壮とも思える釈明、専門家で無い出演者の無責任な発言、マスク不足をあおる映像、などが連日画面にあふれていた。さらにネットによる誹謗などが多くあったと言う。

話がそれで申し訳ないが、電気通信の世界で使う基礎的な用語に、「負帰還」と「正帰還」と言う概念がある。理論的には複雑な数式を使うが、話を簡単にする。

増幅回路において、負帰還とは、出力信号の一部を入力に戻し、入力信号と逆位相で合成する事によって、回路の増幅度は低下するが、広い周波数帯域にわたって出力の振幅を抑えて、増幅回路の特性が改善され均一な増幅度が得られる。

一方、出力信号の一部を入力に戻し、入力信号と同位相で合成するものを正帰還と呼ぶ。出力信号が帰還されて入力信号を増大させ、それが増幅されて帰還され、また増幅され帰還されを繰り返すので、正帰還はその量により発振を引き起こす。

マスコミの今回の集中報道の態様を見ると、上記の回路理論で言うところの、「負帰還」というよりも「正帰還」に近い扱いだったのではないかと思ってしまう。報道にバイアスをかけることなく、そのまま垂れ流すので、我々は発振され増幅(誇張?)された情報を受け取らざるをえない。

途中で、冷静になればと政府や行政が呼びかけ始めたとはいえ、最初から過剰反応したうえ、マスコミが発振状態にあおっているので、なかなか冷静になれるものではなく、庶民の感覚でマスク買いに走らざるを得ない。30数年前におきた石油ショックによる、トイレトペーパー買占め騒ぎが想起された。

NHK でさえも、事の趨勢によっては、日本の将来方向が見えるだろうと言われた、「民主党代表選挙」の中継を途中中断してまで、厚生労働大臣の新たな感染者が増えたという、発表報道に切り替えてしまった。新

型インフルエンザの実態が、相当分かってきた時点でこのありさまである。

これらの動きをみると、感染者が出た地域の方々には大変気の毒だが、自分自身が一次感染を含めて、その当事者にならなかったことに、「ほっ」としているのが、偽らざる心境である。

メキシコでのインフルエンザ流行の最盛期のマスコミ報道は、一時帰国したのでわからないが、流行初期の頃は、この件に関しては余り報道されていなかったとおもう。最もそれが初期対応の遅れの一つだとの批判もあったようだが。現在では街も警戒レベルを下げ、落ち着きを取り戻していると言う。

しかしながら日本でのこの騒ぎも、過去の色々な例に見られたごとく、この問題の本質はなんだったのかという、深い検証もなくあっというまになくなってしまいうだろう。まるでオーケストラのように、指揮者の棒一振りで音楽が始まり、暫くタクトが振り続けられている間は、音楽が鳴り続け、最後の一振りで、「パタ」とやんでしまうとおなじように。違うのは指揮者が誰だか不明だけである。

今回のタイトルに採用したのは、「**El tiempo aclara las cosas y el tiempo las oscurece**」(エル

ティエンポ アクララ ラス コサス イ エル ティエンポ ラス オスクレッセ と発音し直訳はタイトルの通りであるが、サブタイトルは同様の別の諺から採用した)

物の本質は始め不明であったのが、時とともに分かってくることもあるし、はじめ、人々を驚かしたようなことも、次第に誰も知らないことにもなるという、人間と言うか時の相反することを述べている。サブタイトルは、病気は医者や薬が治すものと、一般には考えがちであるが、時が治してくれるというのである。

両方とも生じた問題は、時が解決してくれることが内容的に述べられている。今回の新型インフルエンザ騒ぎも、タイトルやサブタイトルの諺に込められたように、この問題がぼかされること無く、時が解決されることを望むと同時に、メキシコへの再渡航に当たって、今度は逆にメキシコへの入国の際に、日本からの飛行便だというだけで、問題視されることがなければよいがと祈っている。

当方として、健康に留意することは勿論大切であるが。

(2009年5月26日、再渡航許可の連絡を受け、急遽書きました)